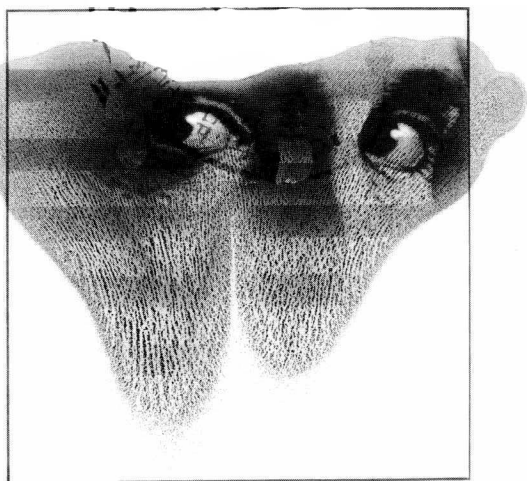


遠藤周作

真昼の悪魔



滕周作
昼の悪魔



新潮社

真^ま昼^{ひる}の悪^{あく}魔^ま

定価 九五〇円



発行 昭和五十五年十二月十日

三刷 昭和五十六年二月十五日

著者 遠藤周作

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一 振替 東京四一八〇八
電話 業務部 03(26)五一一一 編集部(26)五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本株式会社

© Shusaku Endo, 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さる。送料小社負担にてお取替えいたします。

真昼の悪魔／目次

プロローグ	7
四人の女医	17
幼き者を躪かす……	27
二十日鼠	37
いやらしい悪	48
殺人未遂	58
罪と罰	69
二番目の出来事	79
俗物のプレイボーイ	89
反応なし	100
現代人についての対話	110
探偵	120

軽井沢

130

続軽井沢

140

容疑者を絞る

150

難波は最初の仕返しをされた

159

彼は神経科に送りこまれた

169

難波のうけた脅迫

179

彼は裏切られた

189

神父登場

199

悪魔についての話

209

神を畏れぬ……

219

嘲 笑

229

真昼の悪魔

238

装幀 三尾公三

真昼の悪魔

プロローグ

少し寒いが、よく晴れた日曜日だった。

四谷の上智大学にそった土手道で子供たちが声をあげて走っていた。子供たちはそばの聖イグナチオ教会のミサに來たのだが、九時のミサが終って親たちが神父と外で雑談をしている間、土手で遊んでいるのである。

九時のミサのあと十時のミサが行われている最中である。

ひろい教会では外国人の信者もかなり交って隙間のないほどぎっしり詰っている。ちょうど、福音書の朗読が終って、説教がはじまるところで祈禱席きとうのあちこちで咳せきこむ音や鼻をすする音が聞えてくる。

「今日は」

白髪の柔和な顔をもった外人神父が信者を祝福してから話をはじめた。

「悪魔の話をしたいと思います」

うつむいていた信者たちはびっくりしたようにこの神父に顔をあげた。普通ミサでこんな悪魔の話など滅多にすることはないからだ。

だがこの外人神父は上智大学の聖職者のなかでもすぐれた哲学者として有名な人だった。彼の

書いた『聖トマス存在論』や『スコラ哲学概論』は日本の学界でも高く評価されている。

「皆さまのなかで『エクソシスト』という小説をお読みになった人もいらっしやるでしょう。あれは映画にもなりましたから映画を御覧になった方もおられるかもしれません」

手を前にくみあわせて、おだやかな微笑を皆に送りながら神父は流暢な日本語で話をつづけた。「それは一人の小さな娘に——無邪気で悪も知らなかった少女にある日、悪霊がとり憑いた話です。少女はその日からまったく別の怖ろしい人格になり、口にすることもできぬような行動をはじめます。彼女の母親は精神医に相談し、神父に助けを乞い、その少女から悪霊を追い出すため、凄惨な努力を致します。『エクソシスト』はその努力の話です。

そんな馬鹿げたことなど信じられぬと皆さんはおっしゃるでしょう。そんなものはアメリカの小説家がつくった作り話だと思いいになるでしょう。

ところがこの小説がモデルにした出来事が実際に米国であつたのです。実際の事件と小説とが違っているのはただ一つ、悪霊がとり憑いたのは小説では少女ですが、実際の事件では一人の少年だつたということだけです。

しかも、その事件にたちあつた神父は——実は私の伯父でした」

この最後の言葉に祈禱席を埋めた信者たちは一瞬、水をうったように静まりかえつた。神父は自分の話がみんなの心を惹きつけたのを感じて、嬉しそうにまた微笑をうかべた。

「少年に果して悪霊がとり憑いたのか。それとも、それは一時的な極度の精神錯乱にすぎなかったのか、——実際の事件に立ちあわなかった私にはわかりません。しかし私個人としては、むしろこの事件は悪魔とは別に関係のない精神錯乱によるものだと考えています。なぜなら悪魔というのは——普通みなの間違つて考えているように人間を狂人にさせたり、奇怪な行動に走らせた

りは滅多にしないからです」

彼はそう言って両手の指をくみあわせ、

「悪魔というと西洋では子供までが耳の長いあごの尖った絵を思い浮かべます。あるいは手足の爪のびた鼠のような怪物を想像します。どれもこれもが人間をぞっとさせるような醜い、いやらしい姿をしています。でも悪魔とはそんな滑稽な、あるいは我々が尻ごみをするようなものではないのです。悪魔は自分が悪魔だと訴えるような姿を少しも持つてはいません」

教会の外では午後からここで行われる結婚式のために礼服を着た若い青年たちがもう受附の机を運んでいる。四谷の駅では日曜日のせいで平日より降車客の人数は少ないが、それでも家族づれや恋人たちが次々と改札口を通りすぎていった。

このあかるい陽ざしの風景を見まわしても悪魔のことなど、まったく考えられもしない。実感も現実感もない。ここは第一、日本なのである。

だが聖イグナチオ教会のなかだけは、神父の巧みな話術のため、信者はひきこまれたように耳かたむけていた。

「では悪魔がいるとすれば、彼はどんな姿をしているのでしょうか。どんな風にあらわれるのでしょうか。上半身は人間で下半身は獣のような恰好で出てくるのでしょうか」

誰かがくすくすと笑った。神父もその笑い声のした方角に笑顔をむけて、

「今、どなたかがお笑いになりました。お笑いになったのは無理ありません。私の話があまりに馬鹿々々しいからです。悪魔なんて殊更に持ち出したのが愚劣だからです。だが皆さん」

老神父はここで一段と声を大きくした。

「それが——悪魔の狙いなのです。悪魔とは皆さんに自分が馬鹿々々しい想像の産物だと思われ

たがっています。悪魔なんて実在しない、愚劣なオカルト映画の主人公だと皆さんが考えることを望んでいます。そしてそういう心のなかに悪魔は目だたぬ埃ほこりのようにそつと忍びこむのです。

そう。悪魔は埃に似ています。部屋のかなかの埃には私たちはよほど注意しないと絶対に気がつきません。埃は目だたず、わからぬように部屋に溜たまっていきます。目だたず、わからぬように……目だたず、わからぬように……。悪魔もまたそうです。

アンドレ・ジイドという仏蘭西フランスの小説家がうまいことを申しました。悪魔の最大の詭計きけいは自分が存在しないように人間に思わせることだ……と」

誰かが抑えていた咳をした。若い女性である。彼女はハンドバッグからハンカチを出して唇にそつと当てた。香水の匂いがほのかに漂った。

ミサが終ると祈禱席から立ちあがった信者たちはそろそろと外に出た。出口で日本人神父が皆と挨拶をとりかわしている。

彼女は笑顔をみせて知りあいの婦人たちと話をしていた。

「わたくしたち、これから『奇跡』という映画をみるのよ。とっても素晴らしいんですつて」

「どこの映画？」

「フィンランドだったかな。一般上映はされないけど、みた人は皆、感動しているわ。一緒にいらっしゃらない」

「ごめんなさい。今日は駄目」

「また病院？」

「ええ」

彼女がたち去ると残った婦人の一人が友だちにたずねた。

「どなた？ あのかた」

「お医者さま。若い女医さん」

「奇麗な人ね」

若い女医はそれから二十分後、ホテル・ニューオータニの広いティールームで紅茶を飲んでゐた。眼の前のひろい窓から水の流れる日本庭園がみえた。外人客たちが二、三人、橋の上で写真を撮っている。

彼女はさっきの神父の話を思いだしていた。悪魔の話。しかし彼女は神に実感を持たないように悪魔にも現実感を感じられなかった。

教会にはこれで一年かよったが、どうも溶けこめない。もともと教会に出かけたのは自分の心に巣くう何とも言えぬ空虚感のためである。信仰でも持てばこの空虚感と白けた気持は癒されるかと思つたが、それも駄目だった。

この白けた空虚感はまだ中学生だった頃からずっと続いている。高校の時も女子医大の学生になつても決して消えない。学生時代、勉強は優秀な成績をとつたが、勉強も研究もぼつくりと穴のあいたようなこの胸を充たしてくれなかった。恋愛の真似事も三、四回したが、それに酔えたことは一度もない。

誰も彼女のそんな心を知らない。彼女もまた教授や研究室の仲間になんか自分の素顔は絶対に見せないからである。二つの顔をいつも使いわけて毎日を送ってきた。

紅茶を飲みながら彼女はさっきから、斜め右の席で一人の中年の男が自分をそつと盗み見てい

るのに気がついていていた。こちらが眼をむけると、向うはあわてて顔をそらせた。

(そのうち、声をかけてくるだろう)

今までの何百回という経験でよくわかる。ハンドバッグから煙草を出して男を誘うようにゆつくりと吸った。

予想していた通り男がまるで彼女の紫煙に吸いこまれたように立ちあがり、

「あの……」

テーブルのそばに来て、照れたような顔して、

「お一人ですか」

口臭のように関西弁のアクセントがその言いかたにまじっている。神戸か大阪から出張で上京してきた会社員にちがいない。こっちがわざと怪訝(ケツケン)そうな表情をして、

「ええ」

とうなずくと、図にのって、

「およろしかったですら、一緒に食事、しませんか」

微笑(ほほえ)みながら女医は相手を傷つけないように断った。男はがっかりしたようにうなずいてカウンターの方に去っていった。

面倒臭いから断ったまでである。一緒に食事をして向うが次に望むものが何であるかはわかつている。彼女には向うの望み通りに彼が泊っている部屋に行っても別にかまわなかった。みだらなこと、不道德なことをしたとはまったく思わない。ただ、そんな行為にはこの白けた氣持を充たすだけの悪の快感が伴わないのだ。

二カ月前もこのホテル・ニューオータニの廊下でやはり一人の青年に誘われたことがあった。

「条件があるけど……よくって」

と彼女は微笑みながらその青年に話しかけた。

「条件って。お金？」

「いいえ。部屋に入ったらひとつだけ、言うことをきいて頂きたいの」

二人はエレベーターで旧館の六階までのぼった。エレベーターをおりる時、その青年はまわりの客に恥ずかしいのか、一人で先に出て、廊下をすたすたと歩いていった。

部屋に入ると男は、

「条件って？」

ともう一度たずねたが、彼女は笑ってバスルームに入った。

鏡のうしろ側にコップなどを入れる棚があつて、そこに針やボタンを入れた小さなセロファンセロファンの袋がある。

その袋を破って針を出した。

バスルームを出ると青年はちょうど、ホテル備えつけの浴衣に着がえているところだった。彼の持ってきた黒い鞆かばんの口がきたならしくあいて、そこによごれた靴下がつつこんであつた。

「ひとつだけ、言うことをきいてくださるわね」

「いいよ」

青年は浴衣の胸をあわせながら簡単に応じた。

「掌てのひらをその机の上にのせて」

「こうかね。何をするの」

彼女は五本の指を大きく広げた手の甲に縫針を突き立てた。悲鳴をあげて青年が飛びあがつた。

「何をする」

「かして。取ってあげますから」

女医である彼女は針の突きさしかたはうまかった。黒い血が胡麻^{ごま}つぶほど吹き出ているだけだった。

約束の通り、青年に体を任せた。だが悪いことをしているという快感は一向に起きなかった。

愚劣な馬鹿々々しい時間つぶしだった。白々とした気持で彼女はその部屋を出た……。

(悪って何かしら、何が悪なのかしら)

その日もいつもと同じような疑問を彼女は思った。それは高校生だった頃から、いつも心に浮ぶ疑問だった。

悪とは一体、なんだろう。世間で言う悪。たとえば何かを盗む。人をだます。それは相手には迷惑をかけるだろうが、それ以上の何ものでもない。悪というようなものではない。人を殺す。しかし人を殺すのはほとんど貧しさや憎しみや欲望が伴っている。それ相応の理由がある。それ相応の理由があって人を殺すことが悪だとはとても思えない。また人を殺してはいけないと言うのは社会の秩序を保つため、たがいの身の安全を保証しあうための約束事にすぎないから、これを破っても良心をえぐるような辛さを感じるとはとても思えない。むしろ犯行が発覚しないか、発見されないかという不安や怖れのほうが人間には強いのだ。

ましてたかがホテルで行きずりの男と寝ることが悪だの破廉恥だのどうしても思えない。なぜいけないのか、さっぱり、わからない。

だが、さきほど中年の男が誘ってきた時、彼女は微笑しながら断った。そんなことをしても、この白けた虚ろな胸の穴が充たされないのである。